

経済学史学会（第82回大会：東京大学）2018年6月3日（日）

セッション「アダム・スミス研究を回顧する」趣旨 田中秀夫（愛知学院大学）

東大は日本のスミス研究の中心拠点の一つであった。矢内原忠雄（アダム・スミスの会、初代会長）には「アダム・スミスの植民地論」という論文があるし、大河内一男（同、第2代会長）、内田義彦、小林昇（第3代会長）などは東大で育った。天皇制ファシズム＝軍国主義、半封建的絶対主義に直面し、戦後の民主化のなかでどのような新体制と経済構造の社会を構築するかが重要な課題であった。東西冷戦時代に入り体制問題は深刻であった。しばしば「市民社会」が語られた。スミス研究は戦後の市民社会形成に関連があった。

1960年の安保改定で全面講和論が敗北した所得倍増政策から高度成長を経て、豊かな社会、中間階級が厚い社会が生まれた。資本主義は修正され社会民主主義が定着したのが1960年代から70年代である。金権腐敗は社会を蝕み、大学紛争は政治・社会の腐敗、公害やベトナム戦争への加担、大学の腐敗の告発であり、マルクス、ルソー、毛沢東、フランクフルト学派、フーコーなどが援用された。ケンブリッジを中心とする自然法と共和主義研究は遅れて伝わり、1980年代からS啓蒙における経済学の形成、自然法、共和主義と経済学（PE）の関係に関心が集まった。『富と徳』（1983）は画期的な研究であった。

冷戦の終焉、東欧革命、ソ連の崩壊という1989年から1991年の大変動はマルクス経済学の没落を決定づけた。日本はバブル崩壊、経済の苦境に喘ぐ。アメリカの市場開放を迫る経済構造協議が圧力を増し、大型公共事業、総額650兆円の財政出動を行い、累積債務を生み出した。今日までの四半世紀に及ぶわが国の経済の低迷をスミス経済学で説明可能か。それは変動相場制への移行（1973）によるグローバル化を無視しては理解できないであろう。円の切り上げによって交易条件が厳しくなった我が国の製造業は海外進出、多国籍化、グローバル企業化を強いられた。日本－中国関係を考えたとき、ヒューム・タッカー論争の主題と類似性がある。世界経済のグローバル化にスミス研究はどう対応したか。英国、米国、EUの動きとスミス研究は、どのような対応を見出せるか。今日の世界経済は、自由貿易と保護主義の対立を繰り返しているが、自由貿易の恩恵と必要な保護のバランスをとるスミスの自由主義経済論は、今なお基本的な原理ではないだろうか。

このセッションでは、日本と海外のスミス研究を回顧する。渡辺報告は、主に戦前の日本のスミス価値論を取り上げる。田中報告は戦後から現代までの事件史を視野において、スミス研究との関連の有無について鳥瞰する。最後の篠原報告は、最近の『道徳感情論』、『修辞学講義』、『哲学論文集』に関する注目すべき研究動向を紹介する。

三者三様の報告であるが、活発な討論を期待したい。

## 第1報告「戦前から戦中・戦後、トリオ（内田・小林・水田）までのスミス研究」

渡辺恵一（京都学園大学）

### I はじめに

あたえられた論題はあまりにも茫漠としており、かつ報告時間も限られている。したがって第1報告では、研究史のなかの重要な「一断片」であるスミスの価値論をとりあげることにしたい。その理由は、大きく言って二つある。

まず、スミスの価値論については戦後膨大な論文や著書でこのテーマがとりあげられてきたが、いまだその解釈について定説がないといった状態である。海外のスミス価値論史については、上下2冊からなる中川(2010-2016)の浩瀚な著作が完結した。だが、わが国の戦前のスミス価値論研究については、小沼(1983)を除けば、未だ十分なサーヴェイも総括もなされていないからである。

もう一つの理由は、内田は『経済学の生誕』(1953[1962])において、戦前のスミス研究が「価値＝剰余価値学説史」視点と「イギリス市民社会形成史」視点とに分離していたと指摘したが、戦前のスミス価値論研究の具体的内容や、その水準、さらにはなぜ当時の研究が後者の視点から切り離され「価値論イジリ」に終始したのかについては論じていないからである。しかし福田徳三が『経済学講義』(1909)で、スミスについて「彼が所論の精髓とも云う可きものは・・・、かれが英国并に仏国学者従来の所論を普く網羅統一し、之に一段の進歩を加えたる其価値論是なり。」(126頁)と述べたように、学派の如何を問わず、経済学研究における価値論の枢要性はその当時自明のことであった。したがって、経済学の源流としての『国富論』体系の礎石であるスミス価値論の解明は、ただ「価値論イジリ」といって済ませることのできない重要な問題をはらんでいたと思われるからである。この問題については最後に言及することにした。

### II 大正から昭和までのスミス研究

明治10(1877)年前後に始まるスミス経済学の導入期に決定的な影響をあたえたのは、日本の近代化のアジェンダを「自由主義」と「自由貿易（交易）」に求めた福沢諭吉と田口卯吉である。「明治期のスミス研究の中心は、学会では福澤諭吉の流れをくむ三田の経済学者たちと、在野では田口卯吉をリーダーとする経済雑誌社・東京経済学協会の二つのグループであった」（杉原1992：61頁）。田口の『東京経済雑誌』（明治12年1月29日創刊）と石川瑛作・嵯峨正作分訳による『国富論』の完訳〔本邦初訳〕出版（『富国論』明治21年4月）が、この導入期スミス研究の最大の遺産である。しかし歴史的後進性のゆえに、明治啓蒙期のスミスの自由貿易論は、19世紀欧米の自由貿易論と同時に導入され、『国富論』の理論分析とは切り離された政策論としての有効性のみが議論されたところに、この時代のスミス研究の限界があった。

山崎(1971)は、こうして明治初期に産声をあげたわが国のスミス研究史を統計的に調査

して、次のように回顧している。「1910（明治 43）年までは散発的で研究点数も僅少であり、1920（大正 9）年より急増して、生誕 200 年の 1923（大正 12）年を頂点としながら、その祝典の余燼を残しつつ、1940（昭和 15）年の死去 150 年記念に向かう。やがて戦争の急迫とともに衰退し、戦後の厚みのあるスミス研究の新時代を迎え、1950（昭和 25）年と 1954（昭和 29）年の二つのヤマ場」を迎える。「要するに、日本のスミス山は、1923 年前後、1940 年前後、1950 年代が三大頂点であり、それにともなう二つの小岳として、1911 年前後、1965 年前後をもっている。」（123 頁）

わが国において本格的なスミス研究が始まるのは、明治から大正へと移行する 1911 年前後の時期である。その嚆矢となるのが明治 44（1911）年 3 月 9 日（『国富論』出版日）に慶應義塾大学で開催されたわが国初の「アダム・スミス記念會」（幹事小泉信三）であり、その研究報告は同年 4 月の『三田学会雑誌』「アダム・スミス記念號」（5 卷 3 号）に掲載された。「この特輯号におさめられた論文には、スミスの経済学に関するもののみならず、彼の倫理学や政治学をとりあげたものもあって、スミスの思想を全体として問題にしようとしている姿勢がうかがわれ、わが国のスミス研究がようやくアカデミックなペースでなされはじめてきたことを示している」（杉原 1980：13 頁）。こうして専門的なスミス研究が、やがてスミス生誕 200 年にあたる 1923（大正 12）年に大きなピークを迎える。

スミス生誕特集号を組んだのは、同年 6 月の東大『経済学論集』（第 2 巻第 1 号〔旧巻〕）と東京商大『商学研究』（第 3 巻第 1 号）、同年 7 月の慶応『三田学会雑誌』（第 17 巻第 7 号）、大正 13 年 1 月の京大『経済論叢』（第 18 巻第 1 号）であるが、その動きは『東京経済雑誌』（第 2135 号、大正 12 年 7 月）などの大学以外の専門誌にも及んでいる（杉原 1980b：16 頁注 14、64-65 頁）。戦前のスミス研究のピークが、生誕 200 年と一致したのは偶然というべきであるが、しかしわが国が第 1 次大戦をへて「独占」段階から帝国主義への歩みを加速するなかにおいて、経済学研究を大きく飛躍させるに寄与した二つの出来事があった。第 1 に、大正 8 年に東大と京大に経済学部が開設され、翌年には東京と大阪の高商の商大への昇格が続くなど、時代のニーズに沿った大学再編（理財学部の新設）が行われ、それによって経済系の学術専門雑誌が増加したこと。第 2 に、高島素之による最初の『資本論』完訳が刊行されるなど、大正後期にマルクス経済学が大学を中心とするアカデミックの関心となるとともに、限界効用学派もこれと並行して紹介されるようになったことである（杉原 1992：20 頁、169 頁）。

冒頭でも述べたように、この時代の経済学にとって、学派の違いを問わず体系の基礎理論たる価値論の枢要性は広く認められていた。それゆえ、経済学の源流としての『国富論』の価値論研究がこの時期に本格的に開始されたのである。

### Ⅲ 大正期のスミス価値論研究

『本邦アダム・スミス文献〔増訂版〕』（1979）に登場するスミス価値論に関する最初の研究論文は、明治 44（1911）年の『三田学会雑誌』（5 卷 3 号）に掲載された気賀勘重「スミス

の価値学説」である。

〔1〕 気賀(1911)は、『国富論』第5章(第2文節)で論じられている労働価値論を、「労働購入費用説(labour-purchase cost)」と定義する。その理由は、本章末尾でスミスが「労働はあらゆる物件に対して支払われる最初の価格である根本の代償であると主張して居る」からである(76頁)。スミスの「労働価値」の定義として参照されているのは、シュアール(H. R. Sewall)『アダム・スミス以前の価値論』(*The Theory of Value before Adam Smith*, 1901)であり、これに依拠して気賀はスミスの「労働費用価値説即ち物の価値は之を取得するのに要した労働の分量に基づくものとしての学説である」(72頁)と論じている。

一方、『国富論』第6章には「労働搾取説」ともとれる記述もあるが、気賀はそうした解釈を否定する。実際に「労働費用価値説」が適用されるのは「太古野蛮の自然社会」だけであり、彼は「資本及び土地の私有を以て経済組織の基礎と致して居りまする現代の経済社会に於きましては・・・、価値は労銀、利潤及び地代の三要素から成る場合が多数を占めて居る」(76頁)として、スミスの価値論はいわゆる価格構成説(生産費説)として一貫していると主張する。

〔2〕 河上肇のスミス価値論研究は、本来それ自体を単独の報告としなければならないテーマであるが、ここでは『三田学会雑誌』(第7巻第1号)と『経済論叢』(第18巻第1号)に発表された二論文(1913; 1924)について、いくつかのポイントを指摘することとどめたい。

『国富論』第5章(第2文節)に関する河上二論文の特徴は、第1に、「スミスが凡ての物の真実の交換価値は其物の獲得に要するための労働に相当し、又た之を獲得したる後は、其物の交換価値は之を以て購買することを得べき他人の労働に相当すと為したるは、必しも誤謬と云うを得ない」(1913: 70頁、1924: 145-46頁参照)として、スミスの価値規定を、労働＝「犠牲」(「費用労働」)説と支配労働＝価値尺度説との複合構造において捉えていることである。第2に、第8文節のいわゆる労働の価値＝「不変」説に関連して、河上は「人類全体を一全のものとして論を立てるならば、どうしても価値の標準を労働に求めなければ為らない」(1913: 85頁、1924: 141頁参照)と論じているが、この記述に「後年のいわゆる価値人類犠牲説」が認められること(杉原 1980 a: 297頁)。

そして第3に、スミス批判のポイントとして、河上(1913)では、「スミスの欠点は、貨物の価値を労働にて秤量し得る方面にのみ着眼して、其の労働の価値が同時に又た貨物にて秤量され得る方面を看過した点にある」(72頁)と論じているのに対して、河上(1924)においては、「一定の物を獲得するための労働(犠牲)」を標準とする価値規定と「一定の物を犠牲とすることによって獲得され得るところの報酬(賃金)を基準とする価値規定とを、「彼は救ふべからざる程度に・・・混同した」(148頁)というように、両論文には批判の力点に若干の違いがあることである。

〔3〕 加田の投下労働「貫徹」説と三辺の支配労働＝価値尺度説

加田(1919)は、連載論文の最初に「価値の成立と価値の秤量の標準とは其内容を異にする」(a: 121頁)としたうえで、「本論の目的とするとする所はスミスの価値学説が労働価値

説なることを論証するに存するを以て以下価値成立の原理に就きてのみ叙述せん」(a:122 頁)と論じている。加田は、『国富論』第5章の「物の真実の価格は、之を獲得するに要する労力と労務 *Toil and Trouble* となり」の文意を、これまでの「労働費用説」ではなく、「労働の分量は価値の唯一の決定原因なり」という、投下労働価値説として解釈した。もちろん『国富論』には、「生産行程に於ける価値」以外に、「交換行程」あるいは「分配行程に於ける価値」を論じる支配労働説も並存している。しかし、後者は「価値の発生とは何等の関係なき現象」であり、「労働によりて発生せる価値が社会の諸勢力の間に・・・分配せらるるを示すもの」(b:106 頁)であるから、資本主義経済の分析においても投下労働＝価値分解説がスミスの基本原理とされる。

これに対して支配労働価値説をスミス価値論の基本構造と捉えるのが、三辺(1921; 1923)である。三辺によれば、スミスの価値論は、「一物の価値は之を生産（又は再生産）するに普通要せらるる所の労働量—地代及び利潤に該当する労働量に、之を生産する労働の量を加ふ—に依りて定まる」という学説であるから、これは「標準労働（再）生産費説」と称すべき学説である（小沼 1983: 11-16 頁参照）。

〔4〕舞出(1923)は、「マルクスの指摘する如く、財貨の価値が其の支配労働量によって定まるとなすのは、労働の交換価値をもって、換言すれば事実上賃銀を以て、財貨の価値尺度とするものである」(37 頁)という文章の注記で『剰余価値学説史』(カウツキー版原典)の参照を求めていることから明らかなように、本論文は、方法論的にマルクス経済学の立場から解釈されたはじめてのスミス価値論研究であり、その後わが国の経済学史研究の基本的スタイルを形づくることになる。『学説史』を前提とした学史研究が、投下労働説と支配労働説の「並存」をスミスにおける「混乱」「誤謬」と批判するのにたいして、スミス価値論の基礎は投下労働説であると理解したうえで、それと支配労働説や生産費説との「並存」を「混乱」ではなく「長所」と捉えるのが、森(1925)である。スミス価値論の構造を「複合的」なものと捉える解釈は河上(1913; 1924)を継承し発展させたものである。

以上のとおり、すでに大正期においてわが国におけるスミス価値論研究の「諸類型」はほぼ出揃ったと言えるであろう。

#### IV むすびにかえて—昭和から戦後までのスミス研究と労働価値論

昭和から終戦までのわが国のスミス研究は、山崎(1971)が指摘したように、スミス没後 150 年にあたる昭和 15 (1940) 年にピークを迎える。昭和 15 年といえば国家統制が日に日に一段と強化されていく時代にあたるが、しかし杉原(1992)によれば、「こうした時代的制約にもかかわらず、昭和 15 年から数年間に、わが国のスミス研究は大きく進展した」(89 頁)として、大道安次郎『スミス経済学の生成と発展』(昭和 15 年)、高島善哉『経済社会学の根本問題—スミスとリスト』(昭和 16 年)、大河内一男『スミスとリスト』(昭和 18 年)などが、その成果としてあげられる。とくにマルクス研究の「隠れ蓑」として遂行された高島・大河内の研究が「価値論抜き生産力的『偏向』」に彩られているのは、もちろ

んこうした厳しい当時の思想弾圧の影響によるものである。それゆえ高島が戦後すぐに「価値論の復位」（『経済評論』1946年8月）を發表し、「全体認識の学としての価値論」の意義を指摘したことは、戦後の経済学研究だけではなく、また学史研究にとっても重要な意味をもった。

その一方で、昭和の初めまで遡ってスミス価値論に関する主要なモノグラフをあげてみると、波多野鼎「アダム・スミスの労働価値論」（1923）・『正統学派の価値学説——価値学説史第一卷』（同年）・『経済学史概論(上)』（1931）、高橋誠一郎『経済学史』（1929）・『近世英国経済学史』（1934）・『経済学史(上巻)』（1937）、堀 経夫『経済学史要論（第一分冊）』（1931）、渡辺一郎『経済学説の史的研究』（1935）、中山伊知郎『国富論』（1936）、舞出長五郎『経済学史概要・上巻』（1937）などが目につくが、このうちマルクスに依拠したスミス価値論研究は波多野と舞出であり、昭和15（1940）年以後はもちろん時局の影響があって成果はゼロとなる。

『学説史』に依拠したスミス価値論研究の最大の特徴は、明確な方法論により『国富論』第5章（とくに第1・第2文節）全体に批判的なコメントを加えたうえで、商品論を資本＝生産的労働論をも視野に入れて捉えるそのパースペクティブにあるのだが、こうした特徴は、マルクス経済学導入以前のわが国のスミス研究には見られないものであった。しかしその反面、『学説史』に依拠したスミス研究には大きな問題があった。それは、マルクスのテキスト解釈に誤りがないかどうかという、学史本来の検証作業が十分でなかったことである。昭和15年以降の国家統制・思想弾圧は、こうした学問的な研究を不可能にしまった。したがって、問われるべき問題は、本来「価値論イジリ」にではなく、戦前において「価値論イジリ」が徹底されなかったこと、不十分にしか行いえなかったことではなからうか。1970年代のことだが、マルクス理論に疑問を呈すると、ある大学教員から「マルクスが間違うはずはない」、「君の理解が誤っているのだ。もっと勉強しないとイケないね。」といわれたことがあった。今では信じられない（だが今でも忘れられない）思い出である。

#### 参考文献（一部のみ）

- アダム・スミスの会編（1979）『本邦アダム・スミス文献〔増訂版〕』（東京大学出版会）  
小沼宗一（1983）「大正期におけるスミス価値論研究の諸類型」『東北学院大学論集』91  
杉原四郎（1980）『近代日本経済思想文献抄』（日本経済評論社）  
同（1992）『日本の経済学史』（関西大学出版部）  
中川栄治（2010・2016）『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析（上・下）』（晃洋書房）  
山崎 怜（1971）「アダム・スミス——一つの序章」（杉原四郎編『近代日本の経済思想』、ミネルヴァ書房）  
渡辺恵一（2010）「スミス労働価値論の再読——商品価値の認識と実在」『大阪経大論集』61-1

## 第2報告 「第二次大戦後から現代までのスミス研究を鳥瞰する」

田中秀夫（愛知学院大学）

まず明らかにすべきなのは、スミス研究では、経済学はいかにして形成されたか、スミスは当時の社会をどう見ていたか、『道徳感情論』はどういう書物か、『国富論』との関係は？ スミスの講義した道徳哲学はどんな内容か、分業の概念、生産的労働の概念、市場価格と自然価格など様々な主題を扱うが、これらは研究史のなかで形成された論点や中長期の問題と関係する度合いが強く、個別具体的な事件、出来事、研究者の時代の問題と直接関連する度合いは少ない。大きな時代の括りとの関係は重要で、トリオの場合、戦後日本の民主化、目指すべき国民経済や市民社会と切り離せない。その後の研究者も、歴史としての現代を意識し、中長期の課題を念頭に置いていることが多い。

\*戦前は軍事的半封建的社会か【ブルジョア革命】後の社会か【日本資本主義論争】講座派 vs 労農派 【社会主義革命】か市民革命か \*この時期の東大 【宇野理論】と【大塚史学】の対立 河合栄治郎⇒大河内一男『スミスとリスト 経済倫理と経済理論』(1943)

### 1 《戦後啓蒙とスミス研究 1945～1960》

【事件史 1945『世界』、『展望』創刊、『改造』、『中央公論』復刊 46 20世紀研究所 悔恨共同体 『思想の科学』創刊 東京裁判 日本国憲法 47『啓蒙の弁証法』 49 ハイエク『個人主義と経済秩序』 中華人民共和国 50 朝鮮戦争⇒【東西冷戦】インド独立（ネルー）米対日政策の転換 51 サンフランシスコ講和条約（全面講和敗北）⇒日米安保条約（対米従属） 56 ハンガリー事件 スターリン批判 人工衛星スプートニク 日ソ共同宣言 経済白書⇒「もはや戦後ではない」 56-7 丸山真男『現代政治の思想と行動』上下 57 梅棹忠夫「文明の生態史観序説」 58 欧州経済共同体 Galbraith, *The Affluent Society*. Arendt, *The Human Condition* 59 キューバ革命：カストロ、ゲバラ】

①内田義彦⇒東亜研究所 1940 研究開始。『潮流』NNN 論文。丸山真男、川島武宜、木下順二と親しく、経済学を市民の教養にする方法を考えた。戦後啓蒙の代表、戦後日本社会をいかにして民主主義社会、【市民社会】にするか。社会科学を通じて【市民社会青年】=主体を創る。『経済学の生誕』53 は名著、【文明社会の危機意識】、ルソーとスミス、トリーの権威の原理とウィッグの功利の原理の【両面批判】、【ウィッグ全体主義】、ヒューム vs スミス、スミスからマルクスへ。羽鳥卓也、田添京二、吉澤芳樹、平田清明、山崎怜、山田鋭夫、野沢敏治、鈴木信雄等、後世への影響大

②小林昇⇒リスト研究から出発 自由貿易と保護主義 出征で九死に一生⇒ベトナム経験 戦後の徒労感 『重商主義の経済理論』52⇒ステュアート復権 『重商主義解体期の研究』55 タッカー研究⇒内田・小林論争 スミスはブルジョア・ラディカルか。ステュアートやタッカーと比較⇒スミス相対化。英仏経済学論争 経済学の形成時代 【民富】の蓄積 農工商のバランス=【国民経済】 大塚史学の継承（【前期的資本】と産業資本の切断）と断

絶（エートス論） 剰余価値学説史とケインズ受容（マルクスとケインズ） スミス研究  
再びステュアート研究 デルタの開拓 実証的な学史研究はモデル スミスによって「死  
せる犬」とされたステュアートの復権にかけた小林の研究は学問的公正さの追求。イデオ  
ロギーによる抑圧・脅迫への嫌悪。グローバル化への視点は？

③水田洋⇒この時期の一橋は高島善哉、大塚金之助、杉本栄一 『グラスゴウ講義』翻訳、  
48 出版。ボルケナウ邦訳、マニユファクチュア時代の機械論哲学。ホブズとスミスの  
翻訳。1954『アダム・スミス入門』【伝記的思想史】『近代人の形成』【利己的個人】 英国  
へ。共産党歴史家と交流（ヒル、ミーク、ホブズボーム）。ホブズ、スミス、マルクスを  
並行研究 56『社会思想の旅』ミーク『労働価値論史研究』邦訳（水田・宮本）56 「き  
けわだつみの声」の会 市民運動 国際的研究 スミスの全体への肉薄

\*この時期の京都 高田保馬 白杉庄一郎 出口勇蔵（河上肇⇒）堀経夫（東北大学  
へ）大道安次郎のマルクスの影なきスミス

④アダム・スミスの会（49）世話人3人（矢内原、大河内、大道）後に会長設置 矢内原  
忠雄⇒大河内一男⇒小林昇⇒水田洋 55『本邦アダム・スミス文献』（増訂版79） 初期  
イギリス経済学古典選集 マン『外国貿易によるイングランドの財宝』65。バーボン＝ノ  
ース『交易論』ダヴナント『東インド貿易論』66。チャイルド『新交易論』67。ロック『利  
子貨幣論』78。デフォー『イギリス経済の構図』75。バークリ『問いたです人』71。ヒュ  
ーム『経済論集』67。ステュアート『経済学原理』80。タッカー『政治経済問題四論』70。  
ハリス『貨幣・鑄貨論』75。 ⑤未来社 西谷能雄（西谷啓二の従弟）は弘文堂⇒東京

## 2 《高度成長期のスミス研究 1960～1970》

【事件史 1960 安保改定反対運動 岸退陣⇒池田勇人所得倍增政策（下村治立案）⇒60  
年代高度成長 公害列島（水俣病、イタイイタイ病、四日市喘息）⇒エコロジー・ブーム  
ローマ・クラブ『成長の限界』61 小田実『何でも見てやろう』62 キューバ危機 中  
ソ論争 レヴィニストロース *La pensée sauvage* ハーバーマス *Strukturwandel der  
Öffentlichkeit* 63 成田空港問題 64 東京オリンピック 東海道新幹線 日本 OECD 加盟  
期待される人間像 65 日韓基本条約 ベトナム北爆⇒1973年パリ協定 PLO 66 文化大  
革命 団塊世代・大学入学 ベトナム反戦運動 新左翼 内田『資本論の世界』労働日を  
めぐる闘争⇒価値法則の貫徹 67 東南アジア諸国連合 ガルブレース『新産業国家』68  
大学紛争 パリ5月革命 チェコ事件 エンプラ佐世保寄港】

1960年代 ①【スコットランド歴史学派】水田洋・大野精三郎・佐々木武・山崎怜 61  
内田『経済学史講義』 小林『経済学の形成時代』 『アダム・スミスの味』 66 『生誕』  
増補 ②田中敏弘『マンデヴィルの社会経済思想』。スミスの自由主義経済思想への道。67  
③水田『同感概念の成立』【冷却作用】 内田『日本資本主義の思想像』（【市民社会青年】、  
力作型、コネ型）68 水田『アダム・スミス研究』 平田清明『市民社会と社会主義』

### 3. 《ゆたかな社会 ポスト高度成長 1970～1980》

【事件史 1970 万博 共産主義者同盟赤軍派よど号ハイジャック⇒拉致 安保自動延長  
71 中国国連代表権 ニクソン・ショック＝中国訪問と金ドル交換停止 72 沖縄復帰  
田中角栄「日本列島改造論」 清水幾太郎『倫理学ノート』 73 オイル・ショック 変動  
相場制 74 ハイエク、ノーベル賞 ミュルダールと同時受賞 75 ポル・ポト(76年数百万人虐殺) ロッキード事件 76 ハイデッガー、周恩来、毛沢東死去⇒華国鋒首席 77 ロンドン・サミット 赤軍ダッカ・ハイジャック 78 日中平和友好条約 成田空港開港】  
①1966 内田義彦『社会認識の歩み』分析的方法と【理解的方法】 71 Pocock, *Politics, Language, and Time*⇒Civic Humanism Ignatieff, *The Needs of Strangers*. 【スミスとルソー】、【市場と共和主義】(添谷・金田訳 99) 内田の先駆性 Rawls, *Theory of Justice*  
②佐々木武『『スコットランド学派』における『文明社会論』の構成』(-73) 73 Hollander, *The Economics of Adam Smith*. (小林監訳 76) 小林『国富論体系の成立 アダム・スミスとジェイムズ・ステュアート』 小林昇低成長の勧め 74 内田義彦『学問への散策』 75  
③Pocock, *Machiavellian Moment* (邦訳 03) 【Civic Humanism】 Forbes, *Hume's Philosophical Politics*(田中監訳 2011)【Natural Law】 76 ④Glasgow ed. *TMS, WN* 啓蒙思想国際会議セント・アンドルーズ⇒【スコットランド啓蒙】 経済学史学会編『国富論の成立』 内田・小林・水田鼎談「私たちのスミス研究」、東洋経済「国富論 200年特集」 星野彰男『アダム・スミスの思想像』 Meek, *The Social Sciences and the Ignoble Savage*⇒【4 Stages Theory 邦訳 17】 77 ミーク来日 \*この時期までのミークの影響は大 78 ⑤Glasgow ed. *LJA, LJB* 刊行(水田他訳 12) ⑥Winch, *Adam Smith's Politics* (永井・近藤訳 89) \*ウィンチはスミス政治学を【CH】として読む嚆矢。その影響は 80年代に日本にも浸透、ポーコック MM の受容と重なる。批判で修正する。CHとしてのスミス解釈はわが国でも遅れて登場するが、【自然法思想家としてのスミス】に比べて、少数派にとどまった。[\*フランス・マルクス主義の影響 アルチュセール フーコー]

### 4 《自由主義＝保守の時代 民営化 ソ連の破綻 1980～1990》

【事件史 1979 サッチャー保守党内閣 (-90) ⇒民営化 ボーゲル, Japan as No. 1 米中国交正常化 スリーマイル島原発事故 ソ連アフガニスタン侵攻 イラン、イスラム革命(ホメイニ) 80 ヴェネツィア・サミット 加藤周一『日本文学史序説』 81 レーガン第40代大統領⇒レーガノミックス ミッテラン大統領(初左翼政権) 82 フォークランド紛争 83 第2次サッチャー政権 85 ゴルバチョフのペレストロイカ 男女雇用機会均等法 NTT 民営化 プラザ合意(G5,蔵相・中央銀行総裁会議) ⇒為替相場への協調介入 87 第3次サッチャー政権 国鉄民営化 88 リクルート事件 89 ベルリンの壁の崩壊⇒東欧革命 ブッシュ第41代大統領 日米構造協議⇒(公共投資拡大 450兆円、大店法、独禁法改正; 米＝財政赤字削減、競争力) 天安門事件 フクヤマ「歴史の終わり」⇒92『歴史の終わり』と最後の人間】

1979 A.S.Skinner, *A System of Social Science*. (田中敏弘他訳 81) 81 内田義彦『作品としての社会科学』 82 Campbell & Skinner eds., *The Origins and Nature of the S E*. 83 ①Hont & Ignatieff eds., *Wealth and Virtue* (水田・杉山監訳 90) 【富と徳】両立問題 Pocock, *Virtue, Commerce, and History* (田中訳 93) 【商業ヒューマニズム】\*フォーブズとポーコックに触発された『富と徳』は画期的。84 アダム・スミスの会『続アダム・スミスの味』 小林・杉山『自由主義と保護主義』 D.ステュアート『アダム・スミスの生涯と著作』邦訳 85 内田義彦『読書と社会科学』 ②Sher, *Church and University in the Scottish Enlightenment*. 【穏健派】 ③Robertson, *Scottish Militia Issue* 【民兵論争】から啓蒙へ \*シャーとロバートソンはスミスをスコットランド啓蒙との関連で把握、シャーは穏健派を啓蒙の中心とし、ロバートソンは民兵論争を重視。フィリップソンは弁護士会に注目、洗練=文明化(エリアス)を重視した。ロバートソン著は国防問題を考える参考に。戦争放棄か、自衛隊か、民兵か、徴兵か。

86 ④IPSE \* (ECSSS) 発足⇒スコットランド啓蒙研究の国際的拠点(Richard Sher) ⑤篠原久『アダム・スミスと常識哲学』リードの TMS 批判と応答 マルクスの影なし【コモン・センス】 ハイエク『市場・知識・自由』(田中真晴・田中秀夫訳) ⇒ハイエク・ブーム 88 \* ポーコック来日、学史学会講演 田中正司編『スコットランド啓蒙思想研究』 ⑥田中正司『アダム・スミスの自然法学』第2版 03 LJA から LJB で篇別構成逆転問題 ハチスンへの依存から独立へ \*1980年代以降の田中正司のスミス研究は自然法から【自然神学】へ 89 田中敏弘編『スコットランド啓蒙と経済学の形成』 ⑦Haakonssen, *The Science of a Legislator: the Natural Jurisprudence of David Hume and Adam Smith*. (永井・市岡・鈴木訳 01) \*90年代のホーコンセンの影響は大きく、スミスと自然法の関係に注目。フォーブズの科学的、懐疑的ウィッグ主義のテーゼ。Libertyの近代自然法シリーズも重要(テムスなどのリプリント)

##### 5. 《バブル崩壊 経済停滞時代 1990~2000》

【事件史 1990 マンデラ釈放 バブル崩壊 91 ソ連解体【冷戦終焉】 湾岸戦争 93 日米包括経済協定(クリントン=宮沢) ⇒規制緩和 94 英国鉄民営化(-97) 95 WTO (GATT 継承) 96 ローマ教皇進化論承認 97ブレア政権 98 セン、ノーベル賞】

1990 飯塚正朝『『国富論』と18世紀スコットランド経済社会』 91 ①アダム・スミス国際シンポジウム(ラフィル、ロス、ケアンズ、ドワイア、ワセック) ⇒Adam Smith: International Perspectives, eds. Mizuta and Sugiyama. 野沢敏治『社会形成と諸国民の富』 田中秀夫『スコットランド啓蒙思想史研究』 92 田中敏弘『ヒュームとスコットランド啓蒙』 93 ②水田洋他訳『アダム・スミス哲学論文集』 田中正司『アダム・スミスの自然神学』【自然神学】 94 関源太郎『「経済社会」形成の経済思想』 新村聡『経済学の成立—アダム・スミスと近代自然法学』【自然法】 星野彰男『市場社会の体系—ヒュームとスミス』 山崎怜『経済学と人間学』 95 田添京二『欧州経済学史の群像』 Ross, Adam

Smith, 2 ed. 2010 (篠原・松原・只腰訳 00) ③只腰親和『「天文学史」とアダム・スミスの道徳哲学』【天文学史】\*ロス『スミス伝』は『ケイムズ卿とスコットランド』と共に広く参照。5年ごとに関学で講義。先駆はA・スキナー。フィリップスンやディキンスン、ベリーの日本(人)への貢献。96 大森郁夫『ステュアートとスミス』 Haakonssen, *Natural Law and Moral Philosophy: From Grotius to the Scottish Enlightenment.* 97 田中正司『アダム・スミスの倫理学』上下 田中秀夫「権威の原理と功利の原理」『思想』879 関勲『スコットランド経済とアダム・スミス』 99 田中秀夫『啓蒙と改革』 00 Mizuta, *Adam Smith's Library* 同訳『国富論』岩波文庫 同『思想の国際転移』 伊藤哲『アダム・スミスの自由経済倫理観』 山崎怜『経済学体系と国家認識』

## 6. 《テロとグローバル化の21世紀2000～》

【事件史2001 地球人口61億 IRA武装解除 9.11同時多発テロ アフガニスタン空爆 アルカイダ【テロとの戦い】 中央省庁統合 郵貯民営化 02 ユーロ流通 03 米英軍イラク攻撃 08 リーマン・ショック 10 中国のGDPが日本を超える 11 3.11東北関東大震災 12 第二次安倍内閣 習近平政権 16 英国のBrexit 17 習近平政権第二期】2003 James Alvey, *Adam Smith: optimist or pessimist?*⇒田中正司と交流 田中正司『経済学の生誕と『法学講義』—アダム・スミスの行政原理論研究』 田島慶吾『アダム・スミスの制度主義経済学』 稲村勲『『国富論』体系再考』 04 水田洋・松原慶子訳『アダム・スミス 修辞学・文学講義』 05 ①ケンブリッジ・モーメント=ポーコック、ホント来日 ②Hont, *The Jealousy of Trade* (田中監訳 09) 山崎怜『アダム・スミス』竹本洋『『国富論』を読む』 06 Haakonssen ed., *The Cambridge Companion to Adam Smith.* Ian McLean, *Adam Smith: Radical and Egalitarian.* 07 ②合邦300年国際会議 Raphael, *The Impartial Spectator* (生越・松本訳 09) 08 大島幸治『アダム・スミスの道徳哲学と言語論』 堂目卓生『アダム・スミス』 09 水田洋『アダム・スミス論集』 田中正司『現代世界の危機とアダム・スミス』 鈴木亮『『国富論』とイギリス急進主義』 10 星野彰男『アダム・スミスの経済理論』 ③Phillipson, *Adam Smith.* (永井大輔訳 14) 中川栄治『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析』上(下16) 11 学史学会・福島大学⇒京都大学 佐々木・田中編『啓蒙と社会』(水田洋記念) 野原慎司『アダム・スミスの近代性の根源』 12 田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像』 ハーマン、篠原・守田訳『近代を創ったスコットランド人』 13 Berry, Paganelli, and Smith eds., *The Oxford Handbook of Adam Smith.* Berry, *The Idea of Commercial Society in the Scottish Enlightenment* (田中監訳 17) 田中正司『アダム・スミスの認識論管見』 ④村松茂美『ブリテン問題とヨーロッパ連邦—フレッチャーと初期啓蒙』 16 Otaru Conference 荒井智行『スコットランド経済学の再生』 中野力『人口論とユートピア』 17 Phillipson 来日、学史学会講演

### 第3報告 「海外アダム・スミス研究動向のひとこま

——『道徳感情論』、『修辞学講義』、『哲学論文集』—— 篠原 久（関西学院大学・名）

#### I 範囲の限定

今世紀初頭の『アダム・スミス文庫』（Mizuta 2000）によってその後のスミス研究の基礎資料が提供され、その後、「国際アダム・スミス学会」との提携のもとにラウトレッジ社から刊行が開始された『アダム・スミス評論』（2004年からの数巻はV.ブラウンが現在の数巻はF.フォーマンが編集）と、2006年から16年にかけて（ケンブリッジ、エルガー、オクスフォード、プリンストン社から）出された4種類の『アダム・スミス必携（便覧）』（それぞれホーコンセン、ヤング、ベリ他、およびハンリによる編集）によって、（シンポジウム・書評等を含む）高度の専門誌と独自に工夫された入門書が用意された。2010年には（今は故人となった）ロスとフィリップスの『アダム・スミス伝』（前者は第二版）が出版されている。

本報告は、2009年に刊行されたライアン・ハンリによる『道徳感情論』第6版に焦点を絞った『アダム・スミスと徳性の性格』（Hanley 2009）をとりあげ、それへのリサ・ヒルの批判論文（Lisa 2017）に言及することで、両者のスミス人間像理解を対照させたあと、別様の視点からのスミス理解を提示（および模索）しつつあるステイーヴン・J・マケナの（『修辞学講義』視点からの）アプローチ（McKenna 2006, 2012, 2016）と、ブライアン・グレニの「外部感覚論」（『哲学論文集』最終論文）分析（Glenney 2011, 2015）に注目することにより、スミス「コミュニケーション」論の意義を再確認することを意図している。

#### II 「商業社会」をめぐる——ハンリ対ヒル——

『国富論』出版二百年を記念するグラズゴウ版『アダム・スミス著作集』第1巻の『道徳感情論』（TMSと省略）以後の新版TMSとしては「ケンブリッジ哲学史叢書」中のホーコンセン編のもの（2002年刊）とペンギン・クラシック版のハンリ編のもの（2009年刊、日経BP社版邦訳の底本）がある。前者では（編者注および段落番号とともに）「編者序文」が付されているが「言語起源論」が省かれ、後者では「言語起源論」が（編者注とともに）収録されているものの「編者序文」（および段落番号）がなく、代わりにアマルティア・センの序文が掲げられている。ハンリ編TMSの編者自身によるスミス解釈を示したものが（同年に刊行された）前掲書『アダム・スミスと徳性の性格』である。

スミスの愛弟子ジョン・ミラーによれば、教壇でのスミスの議論（講話）はいずれも「逆説的」な命題（主題）によって始められ、やがて多様で豊富な例証によってもとの命題の正しさにたどり着くよう（教訓と楽しさを与えるべく）工夫されていた（D. ステュアート『アダム・スミス伝』）ということであり、ホーコンセン版TMS「序文」によれば、スミス思想には「理論・思索」（哲学的平静）と「活動」（日常生活での道徳的実践）とのあ

いだの「弁証法的緊張関係」がみられるということである。スミスがこの「弁証法的気質」に基づいて、「外見上の相互対立物の重層的統合（解決）による新たな地平の実現」を模索したのが TMS 最終（第 6）版である、というのがハンリの解釈である（Hanley 2009: 209）。第 6 版改訂でハンリがとりわけ（この弁証法的展開において）重視しているのが、第 1 部最終章（TMS I.iii.3「道徳感情の腐敗について」）から第 3 部中核の二章（III.2「称賛に値することへの愛について」と III.3「良心の影響と権威について」）を経て、第 6 部へと至る流れである（旧版から保持されている第 4 部の「貧乏人の息子」物語 IV.i.8-10 は「道徳性の腐敗」論を補強する寓話だと考えられている）。

ハンリによれば、新たに出現した「商業社会」を基本的に支持するのがスミスの立場ではあるが、自愛心（self-love）の墮落に基づくその弊害面（称賛・承認願望 anxiety、せわしなさ restlessness、欺瞞性 duplicity）を克服するために第 6 版で登場させたのが「慎慮」という（商業的）特性（Prudence）であった（VI.i「自己の幸福に関するかぎりでの個人の性格について」）。ところがこの慎慮には商業社会のもたらす欠点としての「虚栄」（最低次元の自己愛）を克服し「平静」（Tranquility）を回復する役割を期待されていたにもかかわらず、この担い手（prudent man）は自己配慮への没頭から、やがて「個人主義と凡庸さ」（individualism and mediocrity）に墮落し、「高貴さ」と「卓越性」に対してはまったく無関心な存在となってしまふ。「商業的徳性」としての「慎慮」が陥ったこの種のディメリットへの対処（次の段階への上昇）が「古典古代的徳性」としての「度量」（Magnanimity）の復活であって、TMS 第 3 部（とりわけその改訂箇所）がこの課題を担うことになる。「高貴さ」への尊重につながるのが「称賛に値することへの愛」であり、「自己本位」（狭隘な自愛心）を乗り越えるのが「名誉と高貴さへの愛、自分自身の性格の偉大・尊厳・優越への愛」としての「良心」の形成であるからである。しかしながらこの「度量」も、やがて自己本位の克服という所期の目的に反して、他者軽視としての自己優位に陥ることになる（この側面の継承が TMS 第 6 部第 3 章後半での度量の墮落形態としての「過度の自己評価」論である）。こうして倫理的向上を目指す最終段階が、「度量」の担い手（magnanimous man）のディメリットからの脱却としての「キリスト教的徳性」、すなわち「慈恵・善行」（Beneficence）の実践であり、その担い手となる「賢明で有徳な人」（wise and virtuous man）の形成（TMS VI.iii.25）こそがスミス独自の「徳倫理学」の課題である、というのがハンリの解釈である。

これに対してヒル論文「《貧乏人の息子》物語とわれわれの感情の腐敗——アダム・スミスにおける商業・徳性・幸福——」（Hill 2017）は、そもそもハンリが強調する「商業社会」のいわゆる弊害（悪徳）をスミスが問題視していたどころか、むしろ彼は anxiety（承認願望）や restlessness（せわしなさ・繁忙 busyness）に基づく新たな生活に由来する「物質的」幸福を「社会学者」としての立場から積極的に評価していたのであって、「貧乏人の息子」物語のハンリ解釈も、TMS I.iii.3（第 6 版追加章）の「富と権勢の称賛に由来する腐敗」論の表現に影響された誤解に基づくものだと、スミス倫理学のハンリ的解釈

を全面的に否定している。ただし、「道徳哲学者」としてのスミス自身は、古代ギリシャの「エウダウモニア的幸福」につらなる「賢明で有徳な人」を個人的に支持しつつも、これを新たな（物質的）幸福解釈と「調停」することはあえてしなかった、というのがヒル自身の解釈である。

このヒル論文は『スコットランド哲学雑誌』（2003年創刊）第15巻第1号「アダム・スミス特集号」（Special Issue: Adam Smith: Context and Relevance）に発表されたものだが、同号に掲載されたマトスンとドーランの共著論文「想像力の高揚—デイヴィッド・ヒュームとアダム・スミスにおける思索と活動」（Matson and Doran 2017）は、TMSの「貧乏人の息子」物語（寓話）とヒュームの『人間本性論』第1巻末尾の有名な「結論」（知性論から情念・道徳論への橋渡し）とのあいだの「これまで気づかれなかった原文上の顕著な関係（類似）」(striking and heretofore unnoticed textual connections (parallels)) に注目し、両章句（「寓話」と「結論」）における「思索と活動」間の弁証法的展開を通じて、孤独と内省に由来する「気難しい哲学」（「晩年の息子の内省」および「極端な懐疑主義」）に対する現実生活の「活動」の優位が示されているとの解釈を示している。

### III 'Sympathy' をめぐって—マケナとグレニ

ハンリは『徳性の性格』刊行前年の『アダム・スミス評論』に「文体と感情—スミスとスウィフト」という論文（Hanley 2008）を発表し、『徳性の性格』でのスミス倫理学の到達点とされている「賢明で有徳な人」の素材を、スミス『修辞学・文学講義』（LRBL）での「単純な人」（simple man）と「率直な人」（plain man）に求めていた。ハンリによれば、他人の意見に対する態度表明としてのこの二つの人間類型の特徴は、それぞれ「従順・謙遜（卑下）」、「横柄・尊大（自負）」によって示され、これはやがてTMS第6版第6部での「虚栄的な人」（vain man）、「高慢な人」（proud man）の対比として受け継がれるだけでなく、そこでの「賢明で有徳な人」すなわち「模範的人間像」（archetype of human perfection）の描写につらなるものであった。この理想像は、「神聖な基準」に対する劣等性と「人間的規準」に対する優越性を示している点で、「単純な人」（思いやり）と「率直な人」（自尊心）との完全な融合（perfect amalgamation）だからである（Hanley 2008: 90-91）。

TMSの素材（の一部）をLRBLに求めようとするこのハンリの視点は、マケナの『アダム・スミスの適宜性修辞学』（McKenna 2006）によって全面的に提示され、その後も展開されている（McKenna 2011, 2016）のであって、彼によれば、LRBLにおける修辞学的適宜性（rhetorical propriety）は「TMSにおける共感（sympathy）と良心形成（conscience formation）に関するスミスの説明への序論および基盤として理解されるべき」ものであって、単純な人と率直な人の対比も類似の文体（性格）の多様性の例証にすぎず、LRBLの性格論（第7講～第11講）の結語での言明（すなわち「完全な文章家」と同様に「賢明な人も、交際と行動において不自然な性格を装うとはせず、ただ、自分の自然な気質を

規制し、正当な範囲に抑制し、度外れた枝葉を刈込んで、まわりの人々にとって快適な程度にするだけであろう」という格言)がTMSの中核思想となるものであった (McKenna 2006: 92-93)。

スミスがシャーフツベリの文体を批判した理由には、後者の『特徴論』中の論文「独白、もしくは著者への助言」——この題辞 (epigraph) は「外に目を向ける必要はない」であった——にみられる「内向的レトリック」への批判も含まれていたのもであって、聴衆 (audience) の反応を意識したスミスの「外向的適宜性レトリック」に基づく「著者の性格」こそ、「筋の通った本物の性格」となるのであった (McKenna 2011:54-5)。

18世紀ブリテンに生じた「新しい修辞学」へのスミスの貢献をマケナは次のように述べている。「修辞学は《生産的建築術》 (architectonic productive art) として理解されなければならない。人文学分野への新たなアプローチが求められるとき、もしくはまったく新しい学問分野が浮上してくるとき、人間は必然的にレトリック[修辞学という学問分野]を採掘し、この新分野を構築するに必要な概念上の語彙と実用的な道具を手に入れるのである。われわれはこの採掘がLRBLにおいて行われているのを目にすることができるであろう」 (McKenna 2016: 395)。

マケナは「他人の目で」自分を見る「中立的 (公平) な観察者」と、LRBLでの「間接的描写」との役割の共通性を指摘したうえで、スミスにならって、「精神の自然的な目」も「肉体の目」と同様に、対象を正確に理解するための「立場の移動」が必要なことに触れている (McKenna 2006: 132 [この箇所のマケナの整理には不備が見られる])。TMSのこの箇所での「視覚の哲学」(III.3.2)との関連でスミスの「外部感覚論」(ESと省略)を認識論の立場から本格的に分析を試み、「立場の移動」としての「共感 (同感)」(Sympathy)を「疑似体験」(Simulation)として把握するのがグレンニ論文 (Glenney 2011, 2015)である。

抵抗と圧迫という感覚を生み出す「触覚」によってわれわれは外部世界の「存在」を直接に把握しうるのであるが、「触覚」的経験以外の (視覚、聴覚、嗅覚、味覚等の)「内部の感覚的経験 (internal sensory experience)」に対して、精神はどのようにして、外部の原因を帰属させるのか、というのがグレンニの理解するスミスESの主題である。スミスが問題にしたのは「われわれが感覚的経験[sensations]を、外部の事物——すなわち《外部[外部世界]》にあって、われわれからまったく独立したもの》によって引き起こされたとみなすようになるのは、どのようにしてなのか」ということであって、グレンニの (スミス解釈による) 結論は「内部的経験の外部的 (=外在的) 原因は、先天的知覚機構 (inborn perceptual mechanism)によって自動的に (automatically) [視覚と聴覚の場合は「示唆」(suggestion)によって、嗅覚、味覚、温度感覚の場合は「先入観 (予断・予感)」(preconception or anticipation)によって] 突きとめられ、このメカニズムは、触覚的環境 (tactile environment)を疑似体験 (simulate) することによるのだ」というものである (Glenney 2011: 205-6)。

事物の本来の姿（位置）を理解するためには、「肉体の目」と「精神の目」という両器官の欠点を是正するための「立場の移動」をする（共感機構を作動させる）必要があったように、われわれは触覚的対象に属している大きさを（想像力によって）視覚的対象に起因させているのだが、このことからグレニは「触覚以外の感覚によってわれわれが諸対象を経験するとき、それらの対象は、あたかも触覚の固有の対象であるかのように表示され、われわれは、対象の非触覚的経験に対応するすべての抵抗的経験を暗黙裡に心に思い浮かべるのである」との ES 解釈を示している（Glenney 2011: 219）。この触覚的感情移入（tactile empathy）、すなわち「共感による知覚」（perception by sympathy）は、最近の神経科学でその役割が指摘されている「ミラーニューロン mirror neuron」[他者の行動を見たとき、自分もその行動をしているかのように反応する神経細胞]にも依存しているのではないか、というのがグレニの示唆である（Glenney 2015: 251-52）。

— — — — —

ハンリは『徳性の性格』に先立つ論文で、LRBL での「単純な人」と「率直な人」の対比が TMS での「虚栄的な人」と「高慢な人」に受け継がれているという重要な論点を提出してはいるものの、この人間類型を「理想像としての「賢明で有徳な人」」の「素材」に位置づけようとしている点で、また「完全性の基準」に沿おうとするあまり、スミス理解から大きく逸脱する方向に向かっているように思われ、これがマケナの LRBL に基づくスミス人間像、および社会科学視点に基づくヒルの解釈とも対立することになっている。「貧乏人の息子」の寓話に関するマトスンの仮説と、「共感による知覚」という ES をめぐるグレニの示唆はどのような方向に向かう（もしくは向かいうる）のであろうか。

#### 参考文献

- Glenney B. 2011 'Adam Smith and the External World', *Journal of Scottish Philosophy*, 9-2: 205-223.
- 2015 'Perception by Sympathy: Connecting Smith's *External Senses* to his *Sentiments*', *The Adam Smith Review*, 8: 241-255, F. Forman (ed.), London and New York: Routledge.
- Hanley, R. P. 2008 'Style and Sentiments: Smith and Swift', *The Adam Smith Review*, 4: 88-105, V. Brown (ed.), London and New York: Routledge.
- 2009 *Adam Smith and the Character of Virtue*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Hill, L. 2017 "The Poor Man's Son' and the Corruption of Our Sentiments: Commerce, Virtue, and Happiness in Adam Smith", *Journal of Scottish Philosophy*, 15-1: 9-25.
- McKenna, S. J. 2006 *Adam Smith: The Rhetoric of Propriety*, New York: State University of New York Press.
- 2011 'Adam Smith's Rhetorical Art of Character', in Ahnert T. and Manning S.

(eds.) *Character, Self, and Sociability in the Scottish Enlightenment*, New York: Palgrave Macmillan.

— 2016 ‘Adam Smith and Rhetoric’, in Hanley (ed.) *Adam Smith: His Life, Thought, and Legacy*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, pp. 387-404.

Matson, E. and Doran, C. 2017 ‘The Elevated Imagination: Contemplation and Action in David Hume and Adam Smith’, *Journal of Scottish Philosophy*, 15-1: 27-45.

Mizuta, H. 2000 *Adam Smith Library: A Catalogue*, Oxford: Clarendon Press.